

RED STORM

oldsnake

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは「破壊の嵐を巻き起こせ！」の後日談3の数ヶ月前のお話。

<https://syosetu.org/novel/180532/>

これは無理を通して道理を蹴飛ばし過ぎた女の第二の物語

記憶が無かろうと生き様は身体に染み付くもの

下らない天を打ち壊せ、邪悪な神を叩き伏せ、気に食わない運命を壊す

…取り敢えず、真面目なあらすじはさて置き…。気に食わない野郎をぶちのめし、好

き勝手暴れ回る彼女の第二の物語。

目次

登場人物

カナデとグリム・リーパー（死神）の人

物紹介

1

序章

恩は返さないと色々後になって気不味

い

5

人が帰って来ないと待つか探しに行く

か悩むけどもどっちもロクな目に合わな

い

8

勇者つて奴は最後まで諦めないが故に

奇跡を起こす

13

メチャクチャな時にこそ冷静にと人は

言うがそれは無理な話だ。

18

唐突に最悪つて奴は訪れる事はある

21

意味が分からねえよ！

25

そりゃ美味しい方がいいに決まってる

28

行くだけ行けばどうとでもなる事が案

外多い

31

ギャンブルに大事なのは無理な賭けを

しない事

36

トラブルはトラブルを引き寄せる

41

登場人物

カナデとグリム・リーパー（死神）の人物紹介

名前 カナデ

ステータス

筋力 A

耐久 A+

俊敏 B

知力 B

幸運 A+

武器 スピア・ザ・ガングニール？

乗り物 ファイア・ホイール

記憶喪失で色々とゴタゴタに巻き込まれた紅い髪の女。

性格は気が強く陽気、かつ大胆でガサツ、お酒も飲めるし強いが酒癖が少し悪い。人を惹きつける魅力というモノがあるらしく色々と人と交流しているが、それがトラブル

の元になる事が多々ある。

人を凌駕した身のこなしと俊敏性、耐久、怪力は常と言ってもいい程の力はナニカサレタ人なのか。それとも別の要因があるのか？

戦闘力や潜在能力は未知数だ。

ただ分かる事は彼女は只者では無い。という事だけだ。

名前 グリム・リーパー

ステータス

筋力C+

耐久EX

俊敏A+

知力C+

幸運C+

武器 イガリマ

グリム・リーパーことリーちゃんか死神ちゃん。

G&K社、I・O・P社、特にI6Labo直轄のペルシカ博士の指揮下の試作兵器試験や大火力による即時制圧をExcelsive^{過剰}Arme^{武装}部隊、略してEA小隊の

序章

恩は返さないと色々後になって気不味い

G & K 本社の近郊の街…。

…から少し遠く、D02地区。鉄鋼業が盛んで溶接や板金加工などの金属加工で生計を立てる会社数が数多くある町。

取り分け治安が悪い。つと言う程でと無く平和。つて程でもないがご時世で言えば平穏な町だ。

「カナデー…その取って!」

「あいよー!」

朝から晩まで機械音で煩い町工場の作業場は大声で言わないと全く聞き取れない、もしくはハンドサインじゃないと分からない程の音だ。カナデーと呼ばれた青年の女性は青髪の少女に鉄用の溶接棒を纏めて手渡す。器具に装着し残りは手の届く範囲の所に置いた。

「身体大丈夫? 3日前にやっと動けるようになったばかりでしょ?」

「大丈夫、今のところはピンピンしてるよコガサ。そういえば親方はどこ行つたんだ？」
「銃のパーツ作つてんだよ！そう言えば言つてなかつたつけ。今じゃ手に入りにくい古い銃のパーツを作つてグリフィンに納入してるんだよ！凄いでしょカナデ！」
誇らしげに笑顔で言うコガサ。しつかり者で優しく人懐っこい彼女を見ると心の底からホツコリ笑顔が溢れ出す。

「そうか分かつたよ、凄いな〜…」

（え？　古い銃？　グリフィン？　…う…　やっぱり全く思い出せない…）

1ヶ月前、何処からとも無くボロボロで意識を失つていた自分が倒れている所。コガサが見つけて、親方や町工場の皆んなが介抱し、更に記憶が無く何処の誰だか知らない私に衣食住を与えてくれたり…。

……こんなにして貰つてるんだ、頑張つて働かないとな。

コガサの手元をしているとあつという間に夜になり、仕事は終わりを迎えた。朝6時半から夜6時の重労働は身体に堪えるがやりがいを感じる。

この街は急な仕事がない限りはこの時間帯で殆ど終わつて飲み屋やスナック、はたまた家で休んだり…。

治安が良くも悪くもないのはこんな理由があるかららしい、だがそれはそれで良いら

しい。

夜飯のご飯はコガサが作っている。親方曰くたまに塩と砂糖間違えてクソマズくなる、って言うってたな。

「あつ、親方今日は帰って来ないって。納入日が急に一日早まって慌ててたから」

「そうなのか？」

「夜はあんまり出歩かない方がいいよ、最近夜の街で何人か行方不明になってるってD02基地の戦術人形達が言ってたよ」

「物騒だなあ…行方不明になる様な街じゃないのに行方不明って…。」

「そうだよね、道に迷う様程複雑って訳じゃないのに。」

一応町の自警団とD02の戦術人形達が交代で見回りしてるけど絶対に夜は出歩かないでね」

この街はそこまで複雑に入り組んでいない、碁盤の目の様な計画的に作られた町。色々都合により細かい道とかそうじゃない所もあるが道に迷う程複雑じゃない。人攫い？それとも愉快犯かヤバイ変態野郎か。

色々と考えてもしょうがないし明日の仕事もある。今日は少し早いが寝る事にした。

人が帰って来ないと待つか探しに行くか悩むけどもどつちもロクな目に合わない

朝5時半、町工場の朝は早い。

朝ご飯に身支度、顔を洗ったり、合間にニュース番組や今日の天気を見たりと色々やる事はある。でもその日コガサはいつもと違う事に不信感を募らせていた。

「親方が帰って来ていない?」

「朝には絶対いる様な人だし、連絡一つ無しにこんな事絶対しない人だよ。何かおかしくよ」

「それはそうだけど、昼まで待つてみよう。流石に今日は遅れるって連絡の一つくらいは入るんじゃないか?」

「昼まで何も無かつたらグリフィンに電話掛けて色々聞いてみるね」

業務に至ってはコガサが把握していたので何とかなった。親方の知り合いの用事のある人には事情を話して申し訳ないが帰って貰った。

そして昼になっても連絡の何一つ来なかった。

流石にこれ以上はいけない。自警団、グリフィンのD02基地の電話した。コガサはパーティの納入先の本部の方に連絡を入れたが親方は「真夜中だが娘が心配だから真っ直ぐ帰るぞ。」と言っていたらしい。

情報が少ないが自警団とグリフィンの方でその他行方不明者と一緒に搜索中するとの事。

「まさかこんな事あるのかよ…」

「グリフィンの方が辺りの防犯カメラを探しているらしい…です。」

流石に見つかりますよ！町の自警団と天下のグリフィンですよ！絶対に見つかります！なので… 安心しましょうよ！」

「流石に沢山の行方不明者になってる人がいるんだ。手掛かり絶対にある筈だ、きっと大丈夫だよ」

お父さんがこんな事は絶対にしない そう断言し親方の身の安全心配コガサ。

今日は午後は仕事所では無くなってしまい。自警団とグリフィンの情報を待つ事にした。

…だが夜になっても連絡一つも無い状況にカナタはシビレを切らした。

「……… やっぱ悠長に待つてられねえわ。恩人が捕まつてるかもしれないのに黙つていられないわ」

「ちよつとカナデ!?!」

「変態野郎を直接捕まえてしばき倒して居場所を吐かせてやらあ!」

「待つて!危ないよ!」

カナタはヘルメットを被り近くにあつた6尺の角材を片手に町の裏路地に入ろうとする。

「戻ろうよ!危険だから自警団とグリフィンの部隊に任して!」

「言つただろ?親方は命の恩人の一人だ。その親方が拉致られてるかもしれない。なのに指咥えて見てるだけつてのは嫌なんだよ!少しは手伝わせろ!」

「気持ちは分かるけどお!危ないつて!」

「変態野郎は絶対しばき倒してやるからな!」

張り切るカナデにコガサは手を引つ張りやめさせようとするもカナデの力に負けて逆に引きずられる羽目になった。

薄暗い時間に路地裏に入つて行く、進む内に電灯一つ無いくらい道へと出る。

「絶対いる。意地でも捕まえてやる」

「もう…… ところでさ、絶対いるって根拠は？」

「感だ」

「ちよつと戻ろ？危ないって……」

気持ち無鉄砲で危険で衝動的。それでいて無計画。確かに気持ちは分かるが。怖くて仕方ないコガサ。

D02でも治安が特に悪い場所、廃棄された車が放置され道路は整備が追いつかず雑草が生えて辺りの街頭も消えている。そんな所見た感じ300mぐらい続いている。

そんな所に怪しい黒いハイエースがエンジン掛かりっぱなしで止まっている。二人はすぐに物陰に息を潜めた。

「あれ…… 誘拐犯の車…… なのか？」

「車の番号見たらもう逃げよ？本気で不味いって……！」

「何も知らない羊が迷い込むなんて。フッフ、何と可笑しいこと…。」

「うs…!?!」

「カn……」

嫌な予感がした瞬間、強い衝撃が身体全体を襲いカナデは意識を失った。

勇者つて奴は最後まで諦めないが故に奇跡を起こす

水滴、酷い匂い、寒い。起きて早々で意識がハッキリしない。

「起きてコガサ！起きて起きて！」

「馬鹿野郎起きろ」

コガサの声と野太い親方の声が聞こえ完全に起きゆつくりと立ち上がった。目の前に広がるのは下水道の用な通路、しかし道幅は広く車2台分は倒れそうな幅があった。

後ろから声をかけられて後ろを振り返ろうとした瞬間、強い衝撃を受け意識が飛んだ。そこから全く何が起きたか分からない。少しの間考えていると親方おコガサが心配そうに話しかけた。

「おい、頭打つて意識がハッキリしないのか？」

「無理しないでね、私と何がなんだか分からないから」

「おお、大丈夫だ。ちよつと考え事してただけだ」

コガサも親方も軽い打撲らしい、だが拉致されてこんな所に閉じ込められてなんなのか？犯人の意図が全く見えない。

「馬鹿野郎か！コガサから事情は聞いた！探そうとしてくれたのはありがたいがこんな危険な事までするな！」

「ごめん……」

「その… 取り敢えずどu…「不味い、隠れろ！」…！」

叱られて突然の事で意味が分からない、だが親方の必死具合からヤバいと言う事は分かり壁に身を隠す。

汚れている紅い分厚い装甲を持つ歩兵が闊歩していた。人数は一人、だがアレに立ち向かつては行けない。

感であるがカナデの本能がそう言っている。装甲兵はどこか遠くに行き三人はほつとした。

「コガサ… 静かにな」

「大丈夫だよ、私のお父さん元々正規軍の軍人だよ、大丈夫だよ」

「10年前に怪我で辞めてる。それに一般の工兵だ。大したもんじゃない」

「どこかの下水道と言うのは分かるが、脱出しようにもどこへ行けばいいか分からない。」

手当たり次第出口を探さないと行けない。そう思った矢先コガサの一言が脱出の糸口となりえる一言を言った。

「これ、水が流れてるから流れてる逆の方いったら良いんじゃない？」

「コガサ、天才か」

「そうか、その手があつたな」

下水道の流れてる水を辿れば出口に繋がる筈。例え出口で無くて何かしらの手掛かりになる筈。あとは歩兵に気づかれない様にすればなんとかなる。

「k…「コガサ落ち着け、声でバレル」ムツ…！」

周囲には死体もある。まだ日が経っていない心臓や腹を何がで撃ち抜かれたような痕の死体や大量出血が流れ死んだ様な者もいる。流石にこんな非日常でグロい光景はコガサには刺激が強すぎた。

「人型の血のシミ、死体を回収しているのか？でも誘拐して此処でこんな風に殺してなんのメリットが…」

「あんな奴まで出て来たんだ。殺人犯とか快樂犯とかそんなチャチャなモンじゃないのは確か、だがまだ何なのか分からないな」

「ご、ごめん… … … 吐いて… … … いい…？限… … … 界… … …」

道を進むにつれて死体や血の匂いがキツくなっていく。コガサは限界が来て吐き始める。

「早いとこ此処でないと不味いな」

「何で捕まってるか理由が分からないけどそうだな」

「ごめんなさい…… うう…… もうちよつとはぐ……」

濃い死臭、血の匂いに耐えつつ15分。

コガサは精神的にやられてフラフラになりカナデが肩を貸して何とか歩く、次第に元気が無くなつていくコガサを見ると早く此処を出ないと決意が固くなる。

「コガサ、もう少しだぞ」

「まだ諦めたらダメだ、な？」

「あ…… ありが…… とう……」

開くか分からないが扉の前まで来た三人。カナデは扉に手を掛けるが扉は開かない。

「そう上手くいく訳ないかく……」

「こんな手の込んだやる奴がこんなハマしないか流石に」

「……待て、これは……… 嵌められた!!」

左右と来た道、そこから赤い装甲をもう歩兵が取り囲む様に3体現れ銃を向けレーザーを放ち親方の左胸を貫通し膝から崩れ落ちた。

「お父さん……!!」

「親方ツツ!!」

「しつかりしてお父さん!!」

更に此方に向けて容赦無くレーザーは放たれる。そこら辺にある物じゃもうどうする事も出来ない。まして抵抗すら出来ないだろう。

「え…?」

だが、そのレーザーはカナデ達に届く事が無かった。

薄い幕が張られレーザーを全て防いだのだ。その中心には一本の槍が浮いていた。

【《スピア・ザ・ガングニール》起動完了

損傷率90% 起動安全範囲5%未満

現状使用可能武器

機動 しますか? Yes & No ー

突然の事で理解出来ない。だが見えた希望は手放す事は出来ない。

「YESだ! やってやるよ!」

カナデは槍、スピア・ザ・ガングニールを勢い良く握った。

メチヤクチャな時にこそ冷静にと人は言うがそれは無理な話だ。

突然現れた槍、カナデは槍を迷いなく握りしめる。赤い装甲歩兵はレーザー銃を乱射するも障壁に阻まれる。即座に明らかに戦闘用に作られた様なスーツに変身していた。

「カナデ！それなに?!なんなの!？」

「知らない！けど助かるならそっちに賭けるしかないだろ！」

【身体に異常 異常な爆発による記憶喪失と判断

ライブラリの閲覧を推奨、、、ライブラリの破損を確認 表示不可

声帯認証は不可と断定 指紋認証に一時的に切り替えます

「ごちゃごちゃ煩い！サツサツとこの場を何とかしろオオオ！」

【長距離テレポート開始 数秒前から転移妨害を確認

妨害による演算に支障は無いと判断 テレポート開始まで10秒

なんかよく分からないが、この土壇場でなんとか助かりそうだ。

【残り5秒、、、テレポートの妨害のレベル上昇を確認

正確なテレポートは不可能と判断　テレポート断念します」

【注意　索敵範囲内に258箇所の監視カメラ等を確認

敵に行動が漏れている可能性大

撤退を提案　装甲二輪　ファイアーホイール起動

サイドカーも展開します。」

何も無い空間からゴツイ赤色の大型バイクが現れる。カナデはなりふり構わず親方をサイドカーに乗せバイクに飛び乗った。

「速く乗れ！」

「運転出来るの!?!」

「いいから乗れ!!」

カナデの後にコガサもバイクに乗った。

「このバイクのスペック教えろ！」

【最高速度マツハ1.5　最大加速　時速100km

障壁展開により今の攻撃は99.9%通らないと判断

重力操作　逆コーラップス技術により操縦手、一般人、怪我人共に直角カーブも問題

ありません」

「よく分からんが兎に角ヨシ！」

唐突に最悪って奴は訪れる事はある

森林地帯の夜の森、誰も居ない真つ直ぐな道路をカナデとコガサ、重症の親子を乗せてファイアーホイルで爆走する。

余程高度な物らしく時速200キロで走っていても風には当たらない。前に透明な膜の様な物で風を防いでいるらしい。

「ああ…… 突然の事過ぎて意味わからない。アイツらはなんなんだよ全く」
「ううつつ…… キツイ…… お父さんは大丈夫…… なんです……か？」

【臓器に深刻なダメージあり】

止血、再生とも持続していますが消失している箇所が大きい為早急に最寄りの施設の整った病院への治療が必要です」

「分かった、飛ばせるだけ飛ばせ。私の恩人なんだ死なせる訳には行かない」
ハイウエイに入りるも勢いは落とさずに突っ走る。

急がなければ死んでしまう。急がなければ。死なす訳にはいかない。そんな思いで胸がいっぱいになる。

『ちよつとその大きいバイク!! 止まりなさい!!』

サイレン鳴らされバイクで追いかけてくる金髪の女性。その後と同じく金髪だがツインテールの少女が追いかけて来た。

「……あの人達、グリフィンの戦術人形だ……じ、事情を話せば先導してくれるんじゃない?」

「そうだな。要らないイザコザは起こさないに越した事はない」

時速200キロの大型バイクはあり得ない程の急停止をみせる。その挙動に驚くも金髪の戦術人形は怒鳴りながら近づいて来た。

「速度超過、ナンバープレートも無いし、何かしらの違反な改造。はあ……現行犯で逮捕で……ちよつと待て!」……何ですか?」

「私の恩人が死にそうなんだよ! 逮捕すんならその後にしてくれ!」

「ツ!? ……分かりました。此方が誘導しますから指示に従って下さい。 m870! この人達病院まで先導しますよ!」

「はい、代金はコーラかサイダーだよVSK、出さなきや動かないよ」

軽口叩きながらも二人は手際よくバイクに乗り他の車を避けて貰う様に誘導を始める。

時速は100キロ、街の病院までは残り15キロと余裕がある。

「赤い髪のアンタ何があったの？こんな怪我普通じゃないよ」

「カナデだ。簡潔に言えばヤバい所に監禁されて逃げて来た」

「カナデって言うんだ。なんかよく分からないけど大変な目に遭ったんだね……」

ん？これ実弾での怪我じゃないな、レーザー系の怪我だね。うわあエグいな……

傷口の所抉れてる」

どうやら親方の傷は相当酷い物らしい。そうと分かれば直ぐにでも病院に連れて行かなければ。そう思いアクセルを吹かそうとするが誘導されてる最中な為思い止まった。

あと数キロ、更に高速道路には車は一台も居ない、これは助かったと一息をつく。自分分はグリフィンにお世話になるがそんな事は構わない二人が無事なら。

バアツンツツツ!!

後ろで誘導していたVSKの方向から1発の銃声が聞こえる。それと共に後ろで掴

まっていたコガサは道路に勢いよく転がり込み腕があらぬ方向に折れ曲がる光景が遭った。

「え？」

後ろには狙撃銃を片手に狙いを付ける不自然なV S Kがいた。

前にはショットガン片手に狙いをつけるV S Kと同じ感じのm 8 7 0がいた。

意味が分からねえよ!

突然の事に理解が追いつかない。

突然走っている最中、コガサが撃たれて倒れ道路へ放り出された。撃ったのは誘導中だったM200。前からM870はショットガンを構えている。

ドオツンツツ!!

「あつぶねエエ!!!」

M200被っているのにも関わらずM870はショットガンを撃つ。M200に当たるが顔色一つ変えずにスナイパーを構えている、あからさまにおかしい光景だ。

「馬鹿野郎!!何しやがる!!」

怒鳴り散らすも無反応、M200は更に1発撃ち込むも何とか回避した。即座に「スピア・ザ・ガングニール」を呼び出し反撃とばかりに振り下ろすも避けられた。

「何がなんか分からねえがヤったからにはブチのめされる覚悟があるんだろうな!!よく分からないが痛い目に合わせて正気を戻してやる!」

思いっきり右に回転し急激なスピードダウンに対応し切れないM200。ハチャメ

チャな挙動の中勢い任せにM200のバイクの前輪をガングニールでぶった斬りバランスを崩して転倒させた。

「そいやツツアアオ!!」

バランスを持ち直す間も無く勢いのままガングニールを投擲しM870のバイクの後輪に突き刺さりバランスを崩させ転倒させた。

「はあ…はあ… 人形ならこのぐらいやつても大丈夫… だよな? 多分…」

バランスを持ち直す、後方に爆発音が聞こえる。どうやら燃料に引火して爆発した様だ。

「もうなんなんだよ! 畜生が!」

コガサや突然の事や親方の事が頭に過ぎる。が突然のヘリの音で即座に考えるのを止める。機銃の掃射が始まり左右に測度を急に落としたりと回避する。

防護車両やテクニカルトラックが数台並んで道を塞いでいるのを目の当たりなしかナデはバイクを止めた。見た目からしてグリフィンの戦術人形が小隊が2個程といた所。

拡声器を持っている薄い紫色の気の強そうな戦術人形が出てきた。

『大人しく投降しろ殺人犯、お前の負けだ。さもなければ痛い目に遭う事になるぞ?』

「殺人犯?? ん? そんな事よりお前ら! 医療機器とか色々あるか?」

『何を言って「あるかって聞いたんだ」……あるが……』

「なら親方を頼む、死なせたら殴り飛ばしにいくからな?…オラア!」

サイドカーを切り離しバリケード側に勢いよく蹴り飛ばした。その瞬間アクセルを踏み込んで左側のガードレールをぶち破りカナデは森のオフロードを逃走した。

「何がどうなってる? 監禁されて逃げて、コガサはあんな事になつて挙げ句の果てには私が殺人犯? ふざけるのもいい加減にしやがれ!」

どうなっているか分からない、つて言うか色々とあり過ぎて疲れたのが本音。取り敢えずバイク「ファイアホイール」をしまいカナデは少しの間森で休む事にした。

そりや美味しい方がいいに決まってる

殺人犯とされ高速道路の追跡を振り切ってから3日目、コガサが死に親方が重症で病院と色々悲しい出来事が起き罪悪感が湧き上がってきていた。しかしそれを考える力は今は無い。

カナデは、彼女は命の危機に瀕していた。

それは……

「腹…… 減った…… 飯イ……」

最初は何処か町に着いたら食料を何とかしようとした。最初の夜は少し寝た後に考え無しに森のオフロード走りまくった、丸一日バイクで走った。

その結果が遭難だった。

今は腹が減り過ぎて集中力が切れ徒歩で川を歩いていた。取り敢えず川の水を呑みまくり空腹を紛らわすも腹の足しにもならない。

そして何か踏んづけてしまい目に入る。細長い茶色の柄の蛇を。なりふり構ってはられない。これを逃したら死ぬかもしれないと脳裏に浮かび力を振り絞り頭を驚掴

み、蛇は腕に巻きついて抵抗するとカナデは蛇に噛み付く。

「んぐウうう……　　ングングング……」

ハッキリ言つて美味しい物では無かつたらしい。生きている状態の蛇を皮ごと齧りついたのでから、しかも当然血抜きもしてない生の状態。でも食べ切らないといけないと感じ30分掛けて齧り付いて頭以外を完食した。

「幾らかマシになつたけどな……」

ぐうう………

足りない、全く足りない。他に何か、何か食べれる物は無いのか。川辺を更に歩くと以外にも野苺が生い茂つていたり、なんかよく分からない赤いキノコが生えていたりとしていた。流石にキノコには手を付けなかつたが。

しかし、軽い物ばかりで腹は全く膨れないというかさんなに変わらない、少し食べ物を入れたばかりか何かを食べたいという食欲が収まらない。

「もつと、蛇みたいな肉っぽい奴を……　　ん？」

そんな時、都合よく目に付いた物があつた。川辺に建物、川魚を逃がさない為に川は塞ぎ止められる様になっている建物を。

「養殖場……　　うっ……」

それは駄目だという罪悪感と少しくらいならという食欲が脳内で争う。結局は速攻

で食欲に負け即行動に移した。

「電気柵じゃないな、ただの柵か」

金網の柵をよじ登り敷地内ひ入る。取り敢えず建物内に入ろうとするも案の定鍵が掛かっていた。それをそこら辺に石を手に持ち鍵をぶつ壊し中に入ると室内には冷蔵庫や銀行、黒いちよつと際どい服があった。

「何処の誰のだか分からないが服もボロボロだったから助かった〜 良かった上着もあつた。流石にこれまんま着るのはな…

おっ？ 飲み物にカップ麺、冷凍餃子とか色ある！ここ電気も通つたんじゃん！お湯も沸かせるし電子レンジもあるし、、、ありがてえよ」

冷凍食品を解凍、カップ麺に湯をいれ食べ始める。そしてそのままがつつき始める。

「うう…… は、犯罪的だ… うま過ぎだろ… ううう…グス…」

その後、心行くまで腹一杯になるまで食べた。3日ぶりの文明的な食事会うま過ぎて夢中だった。

そして腹一杯になり仮眠用の寝所で少し休んでいる内に眠くなり寝てしまった。

行くだけ行けばどうとでもなる事が案外多い

朝、嫌な感じがして目を覚ます。時刻は6時半お腹がぐぐぐと情け無く鳴り響きながらも外の周りを窓から見渡した。

何もない平穏な養殖場と静かな森が朝日に照らされて気持ちいい朝だが鳥の鳴き声一つしない程に静寂が支配していた。

「これはぐぐぐ嫌な予感の中か？」

カナデはその予感を信じて小屋の中にあつた服やら食料やらをリュックに詰め込んで身支度を始めた。最悪、外に出たら銃撃されるかもしれないが木々を盾に林で姿を隠しながら突つ切るしかないかもしれない。

「いや、この感じもう周囲固められて包囲されてるな。これなら鳥の鳴き声一つしないのも納得いく。」

身支度が済む。身体は問題なく動かせる。カナデは深呼吸を三回程し小屋から出る。

こう言うのは狙撃で麻酔を撃ち込み無力化

それが外れた時の為にSMGかARの戦術人形2〜3人、ダミーこみで10〜15人の二段構えがセオリーだ。

予想でしかない。だがそう自分の感が言っている。なら、、、狙撃を全部避けて仕舞えばいい。

「……だツツ！」

麻醉弾が1発放たれた瞬間もう2発目が回避の動きの途中に撃ち込まれる。カナデは無理くり挙動を変えて回避しながら立ち上がり体勢を整える。更に麻醉弾を放たれるが最小限の動きで避け切る。

「見切つ………たツツ！」

そして最後の麻醉弾を右手で横から掴んだ。

「ニア?!?!本当に人間なのかにや!?!あれ!?!」

「嘘でしょ!?!」

「人じゃねえ!?!かなりヤベ高級エ戦術だろ!?!」

「残念ながら人間だよ!?!」

この手の奴らは取り敢えずノシてから話し合う。

じゃないと自分がやられかねないし冤罪で捕まれば自分や親方とコガサを嵌めた奴らに辿り着く日が遠退く。

カナデは「スピア・ザ・ガングニール」を起動…… するも槍しか現れない。同様するも、そんな事気にしてゐる暇は無い。

即座に接近して槍で殴打。更に踏み込んで回転しながら槍をぶん回すし5人吹っ飛ばす。

近接を仕掛ける暇を与えず銃が撃たない至近距離で槍を殴打し倒れている語尾がニヤの戦術人形の足を掴みぶん回してから投げ二人巻き込んでぶつける。

「私は…… 冤罪で捕まっていたまるかよ!!」

「ちよつ! 待つて! 何を……!」

「川で頭冷やしてろ!! オラアア!」

「きやああ!!?!」

S Mの金髪の小さい戦術人形を掴んで川に思いつきり投げ込んだ。川に投げ込まれた人に視線がいった瞬間に倒れている戦術人形から催涙グレネードを奪い取り固まっている所に投げつけた。

「悪いが捕まる訳に行かないんだよ! 私を嵌めた奴をぶっ飛ばすまではな!」

カナデは催涙グレネードで混乱している間に狙撃を躲しながら森の中へ逃げた。

数日後…

グリフィン本部…

某小隊専用武器庫、そんなに広く無い武器庫には特殊な武装と危険物が多々保管されている。爆薬やら特殊な火炎放射器の燃料、20 mのバルカン砲やレールガン、コーラップスの保管タンク等々…。

「ええ、分かりましたよ。たった一人相手に大立ち回りされて挙げ句の果てににげられて…： 分かりました。居場所を特定した次第に捕まえますよ」

「普通なら象用とも言える25 mの麻酔弾を人間用に薄めた物を弾倉に込める。念のためにスタンガンも準備する。」

「偵察用のドローン3機と専用の発電機と各種諸々…： リッパーさんとマードーさんが適任かな、後はバルカンさんは…： 今はやめておこう…」

装備を整え、地図と情報を照らし合わせ着々と準備は進んでいた。

ギャンブルに大事なのは無理な賭けをしない事

6日後

カナデはD02地区から難を逃れ隣のD06地区へ逃げ出す事が出来た。

D06地区の大半は昔から造林業が盛んな所で地区の大半は杉の森。人工的に育てられた杉とはいえ富裕層向けの暖炉の薪から木造建築用の建材まで出荷する地区。

…なのだが若手の人手不足やら過疎化が進みほぼ田舎と変わらない。

稼ぎはいいが林業自体が若者に不人気、力仕事が多い林業よりも都会の方に行って仕事したほうが快適なのだ。

一応、グリフィンの基地はあるが規模は小さく平和そのもので鉄血が攻撃を仕掛けてくる程の立地的、資源的理由も無い。

その為か…

「今日も暇ね〜帰ったら何する?」

「ポケオンやろ〜、厳選したピンクの悪魔の力見せてあげる」

「私はPUOGでドン勝つ食べたいから手伝ってよ」

メチャクチャに意識が低いのだ。ここに居るのはほぼ林業関係の人やその家族、あとは自給自足してる物好きな爺さん婆さんばかり。犯罪なんて起こったとしてもボケた老人の不祥事が殆ど。

故にここを任される指揮官は実戦経験の無い指揮官だが特に黒い噂の無く明るい人物らしい。

そんな小さい平和な町のパチンコ屋、娯楽が少ない街の数少ない大人の娯楽に銀髪の少女と赤髪の女が並んで売っていた。

「この台壊れてるデース!! 私呪われてるデースよコレ!」

「GOD! GOD! GOD! こい! ハーデース!! ……キタアアあ!」

「カナデさん、メチャクチャ運が強いデスね!」

「リー、今日は飲み屋で豪遊だ! 高い酒飲むぞ!」

「やったデース!!」

積み重なったドル箱、対照的にガラガラな席。

カナデとリーちゃんこと、グリム・リーパーは意気投合し毎日パチンコ屋で並びながら打っていた。

何故そんな事になったかと言うと3日前に遡る。

D06地区貨物駅、リーパーはD02地区で犯罪を犯し更に大立ち回りして逃げ出したと言う犯罪者の確保と鉄血の勢力調査に来ていた。とはいえG&Kで手の空いている者が少なく後者が本命で犯罪者確保は二の次だが。

「よーしーさっさと終わらせてバルカンさんとカラオケ行くデースー！」

…と意気揚々とD06地区に入りこの地域の戦術人形や指揮官に軽く挨拶を済ませる。グリム・リーパーの過去の被害や噂、元鉄血ハイエンドと事も余りいい顔はされなかった。その事は仕方ないと書類やら情報を確認する為に個室で書類やらノートパソコンを出し始めた時違和感を覚えた。

「まあ以下仕方なしデスね。ってアレ？」

犯罪者の人相や名前、情報等のデータがすり抜けていた。慌てて探すも見当たらない。やらかしたデスカ!?!と駅に落とし物が無いか調べて貰うも全く無い。

「データの履歴的に…パイロードさんデータ送るの忘れてるデスよこれ!……ま、まあ、犯罪者確保はオマケデース。さっさと鉄血勢力調査終わらせて帰ろうデースー！」

まあ、別についての任務だ。本来の目的をしっかりと果たしているのならもんだは無いだろう。

「よし、今日の仕事はおしまいデス！ゲーセンでも行くデス！」

だがこの町にはゲームセンターなど無かった。あるのはパチンコ屋とか飲み屋、カラオケに卑猥な店、と大人の店。リーパーには少し早い店が多かった。

「バルカンさんはバーに行つてたデスね」

：行つてやろうじゃないデスか！ゴーゴーデス！」

ちよつと背伸びをしてみよう。お酒なんて飲めるか分からないが一か八かで行こう。こちらら高性能なハイエンドボディ。最悪アルコールなんて一瞬で抜ける。

「よし！大人デビューデス！」

「金を出せえ！さっさとこの袋に詰めろ！」

「えっ……」

とバーよドアノブに手を掛けた瞬間怒号が聞こえドアの窓ガラスから店内を見る。二人組の覆面の強盗だ。二人はサブマシンガンとハンドガン片手に店長らしい人を脅して金を袋に詰めさせている。

「バーか、金ならまあ一杯だけなら……って強盗かよ……！」

「あつ、この町の人デスか？ならさっさと戦術人形でもなんでも応援連れて来るデス！」

あと避難誘導出来たらお願いデス」

「呼ばなくても大丈夫だろ。お前が左、私が右で行けるか？」

「はあ……?何を言つて…… ってちよつと待つデース!」

25歳位の綺麗な赤髪の女は何処からとも無く槍が現れて扉を蹴飛ばし強盗に突っ込んだ。リーパーは逆コーラップス技術でメイスを作り後に続く。

そして5秒にも満たない間に強盗の脳天に槍とメイスが直撃し強盗は気絶した。

「ふう、銀髪の。アンタ中々いい動きするんだな」

「なんなんデスカ!?ごり押しにも程があるデスよ!」

「けど、なんとかなつたろ?……よし、店長!酒を頼む。生憎一杯だけの代金しか持ち合わせたくないが……」

「恩はありますけど……流石に強盗でだ直後に店を再開させるのはちよつと……」

「頼むよ、お、ジャック・ダニエルか。それ一杯だけだから頼む」

「は、はあ……」

なんなんだこの無茶苦茶で不思議な人。それがグリム・リーパーの第一印象だった。

トラブルはトラブルを引き寄せる

列車内

丸太を運ぶための荷台が数輛と客室2輛で編成された車内。一人の少女はD06地区の地図を見ていた。データで送られている物と確認して相違がないか確認する為だ。データは少しだけ古く道路が数本増えている程度で案外問題なかった。

「あとはこれをリーさんに渡すだけ。急ぎの案件じゃないし直接手渡しした方がいいか。」

彼女の愛銃である三分割にしたM109ペイロードをガンケースにいれ背中に背負いD06地区へと降りていった。

鉄血やE・L・I・Dと言った脅威に一度もあつた事がない地区。たまに野盗がでるぐらいの平和な地域。これといって調べる事が無い。しかし、最近何かと行方不明が多い。

何か変な事でも起こらなければいいのだけでも…。

あと、オマケに指名手配犯の件もだ。D02地区の警備網を潜り抜け近場の魚の養殖

場で窃盗働く、更に包囲されても突破される。

コマンドーかなんかかかって疑いたくなる。一応顔写真や名前で情報収集はした、正規軍にも話を通したが一切の過去が分からない。まるで突然とこの世界に現れたかの様な。

そんな一級危険人物だ。

とはいえバツタリと当人と遭うなんて宝くじで一等当たるぐらいの確率だ。そんな訳で駅を降り駅前の活気ある屋台が立ち並ぶ所へと出た。

ひとまずリーパーと合流、集めた情報を共有して改めて調査を……。

「ペイロードお久しぶりデース！」

「もつきゆもつきゆ…もつきゆもつきゆ…」

「ツツツ……!!?!?!(なんでそうなるんですか?!)」

手配書と瓜!二つの赤い髪の女がリーパーの隣でハンバーガーを頬張る姿がある。思わずデータを確認するが瓜二つ所か同一人物だ。

「リ、リーちゃん…?そこの…一人とくいつ出会ったのかな?」

「カナデさんとはこの地区に来た初日に強盗一緒にやっつけたデスよ。それとパチンコとスロット教えて貰ったデス！」

頭を抱えた。

胃が痛み始める。

よりにもよって宝くじで一等当たる並みの確率を引いた。しかも更に自分の不手際でリーパーは気付いていない。

ここは一旦何も知らないふりをしよう。隙について護身用で持って来たスタンガンで気絶させよう。鉄血ハイエンドにも効く強力な物だが一般用まで威力を調整出来る中々便利な物だ。

「あはは…、カナデさんね。リーパーがお世話になっていきます。大丈夫でしたか？リーパーは無邪気で子供っぽい所がありますから」

「もきゅ…：…んぐつ いや、むしろこっちの方がお世話になってるぞ。得体の知れない私の為にお金と寝場所をくれたんだ。本当にありがたいよ」

「そのお小遣いはほぼご飯代に消えちつてるデスけどねー 胃袋めちやくちやデカいデス…：…」

「腹が減って何とやらって言うからな。こんな世の中だ食える時に食つとかなきやダメだろ？」

「そ、そうですね…」

ハンバーガーの紙包装の数からもう20〜30個は平らげていらる。それでも尚余裕の表情で食べようとしていりる。ハッキリいっておかしい。

「そうそう、赤い装甲の何かヤベエ奴とか知ってるか？」

「え？ちよつと分からないですね。」

「そうか。」

ドオオオオオオオオオオオ

「ッ！ な、何事デスカ!？」

「住宅街の方から爆発音です。リーパーは無理のない程度にこの地区の部隊の支援を。私はこの爆発の原因を確認次第報告します！」

ペイロードはガンケースを地面に叩きつける様に置くとガンケースはペイロードの身体を包み。パワードアーマーに変化。

「カッケェ！」

「流石はリホーマーの…： 取り敢えず貴方はこれをもつてなさい！そして避難所にも行って下さい！」

そう言うとパイロードは爆発音がした方向へ走り去っていった。